

## 初めて人前で話したこと

僕は、普通の子どもと違う生き方をしてきた。

幼稚園の入園日。式を終えて教室に戻ると、優しそうな女の先生がいた。先生は、「お名前言えるかな？」と園児たちに順番に自分の名前を言うよう促した。僕は、生まれが早いので一番最初だった。

口から言葉が出なかった。恥ずかしかったのもあると思うが、自己紹介というものになぜか慥然とした。先生がさらに僕をうながす。余計に口を閉ざす僕。心を決めた。家ではペラペラ話しているのに、そのときから僕は、家の外では一言も声を発しない生活を始めてしまったのだ。

初日から居残りさせられ、園長先生まで登場して、みんなで僕の声聞きだそうと色々なだめたりすかしたり。ずるい僕は、ひとまず声を出さずに泣いて、その日は家に帰してもらった。次の日もその次の日もずっと声を出さないで、僕は「そういう子」になった。やがて、小学校に上がった。そこでもまだ声を出さない僕。もうそのころには、半ばゲームのようになっていた。まるで、他人に声を聞かれると何かひとつ大事なものを喪失してしまうかのような、魔術的な世界の中で生きていた。外での会話はすべて自己流の手話か、紙や壁や空中に指で書く筆談で通した。子どもたちの話し声の絶えない教室では、いつも先生はこう言った。「やましたくんみたいに静かにしなさい」

毎年、色んな先生が色んな手段で僕に挑戦してきた。居残り、泣き落とし、怒り、力づく、交換ノート。その都度、僕は子どもの特性を生かした色んな手でそれをかわし続けた。ある図画工作の時間、先生が僕の描いた人物画を指差してこう言った。

「見てごらんなさい。ホラ、やましたくんの描く人物はみんな、口が開いてるでしょう？  
本当はやましたくんは喋りたいのよ」

自分でも本当は喋りたいのかどうかわからなかったが、個人的にはその生活になんの不

自由も感じていなかった。喋らないくせに、授業中あてられたら、黒板いっぱい大きな字で答えを書いて笑いを取ったり、僕が勝手に書き始めた連載小説を先生がプリントにしてクラス中に配ってくれたり、運動も得意だったのでクラスでの居心地もよかった。

家では、兄とよく漫画を描いていた。僕があらすじやセリフを考え、兄が絵を描く。そういう真似事は、そのころ出会ったたくさんの本からの影響だった。本屋に入り浸っているうち、本を作る向こう側の世界に自分を投影させて始めていた。

そのうち僕は、ある施設に通うことになった。「そういう子」たちが通う施設。そこは、違う地域の小学校で、放課後にカウンセリングの時間を設けていた。毎週火曜日の放課後、母親とバスで行った。そこで何をするか？ カウンセリングの先生と教室で一時間半くらい、ひたすらおもちゃで遊ぶだけ。その教室には三、四人の子どもがいつも来ていた。でも、みんな一言も声を発しないまま、それぞれで遊び続けている。その間に母親は、違う場所で他の先生からアドバイスをもらっている。そんなことが小学校低学年からずっと続いた。帰り道、母親が「〇〇ちゃんはこの間、ついに喋ったらしいで」とか吹き込んでくる。無視無視。

クラスの子たちは、喋らない僕を喋れない子と勘違いして優しくしてくれたり、こっそり僕にだけ秘密を打ち明けてくれたりした。しかし一度だけ、みんなに声を聞かれたことがある。

ある男の先生が授業参観日に家族のことを書いた作文を発表する課題を皆に与えた。しかしそのとき、僕には作文用紙だけでなくカセットデッキが渡された。当日、学校で読めないのなら家でカセットに朗読を録音してそれを流せという。ついに覆面レスラーが素顔をさらすときがきたかと思った。さんざん迷って、家族の説得を受けて、ひとまず録音した。変な声だ。ありえないと思った。翌朝、親に背中を押されるようにカセットデッキをかついで登校した。皆が「それ何？」と聞いてくる。僕はただニヤニヤごまかす。授業が始まった。順番がきて、僕は教壇にカセットデッキを置く。クラス中、シーンとしている。作文用紙を両手で広げ、顔を隠して、朗読するポーズをとる僕。そして、再生ボタンを押した。声が教室中に流れ始めた。その間、僕はクラスのみんなや参観にきている親たちの突き刺すような視線を作文用紙の裏に痛切に感じていた。まるでフルチンで皆の前に立っているような気分だった。授業が終わり、クラスの皆が一斉に僕の席に集まってきた。つ

いに聞いたぞ！ と正体を見たかのごとく嬉しそうに冷やかす者、僕の声ではないんじゃないかと半信半疑の者、僕が恥ずかしさで泣いているんじゃないかと勘繰る者。僕は顔を真っ赤にして、ニヤニヤごまかし続けた。

しかし、小学校も高学年になって、僕なりに、中学に行ったらこんな通用するはずないなと思い始めていた。中学受験をして、どこか違う地域に行ってやり直そうと思った。僕は実際に受験をしたが、学力が足りなかった。おまけに面接のときに、知っている子が後ろの順番にいたことで、声を出しそびれるという失態を犯した。結局、地元の公立中学校に上がることになった。そのとき、僕の腹は決まった。卒業式に返事をしてゲームを終わらせよう。

卒業式の日。順番に名前が呼ばれる。みんな、一世一代の声で返事をする。そして、僕の番。「やましたけんじ君」「ハイッ」。返事をした。ついに解禁だ。自分の意思で覆面を脱ぎ捨てた。今日で九年間のだんまりゲームも終わり。僕は誇らしく壇上上がった。校長先生も問題児の僕のことをもちろん知ってる。卒業証書を両手で受け取るうとしたそのとき、校長先生がマイクから顔をはずして僕にこっそり言った。「最後まで喋らんかったな」

返事をしたつもりが、緊張と長年の心のストッパー癖のせいで、声が声になっていなかったのだ。僕は複雑な気持ちで階段を下りた。

中学の入学式の後、人が入れ替わったかのように教室で喋り続ける僕がいた。小学生時代の僕を知ってる友達たちは、口が開いたままだった。「山下、静かにしろ！」と、それ以降はよく先生に怒られた。